

# 快進撃企業に学べ

## 「農業はビジネスとして成り立つ」

法政大学大学院政策創造研究科 教授 坂本光司

わが国の空洞化を阻止する産業のひとつとして農業や食料品メーカー、さらにはそれらの川下産業である外食産業や流通産業に期待と関心が高まっている。別の言い方をすれば元気な「第6次産業」である。

それもそのはず、わが国の食料自給率（カロリーベース）は39%と、欧米先進国と比較すれば、異常ともいえる低い水準に落ち込んでしまっていること。また、世界の人口増加に食料供給が追いついていけないという未来が迫っているからである。こうした中、わが国農業のこれからの在り方を示してくれる好事例が「株式会社ぶどうの木」だ。

同社は、石川県金沢市の郊外にあり、現在の主事業は、ぶどうの生産販売だ。このほかにも洋菓子の製造販売、レストランの運営、さらには結婚式場の運営など多彩な事業を展開している。創業は1982年。現社長である本昌康（もと・まさやす）氏が「ティーガーデンぶどうの木」という店名で開業している。本社長は大学卒業後に農業、とりわけ両親が始めたぶどうの将来に着目。実家に帰り、事業をスタートさせた。

当時のぶどう農家は大半が小規模の家業的農業だった。そして、生産している品種も当たり前の

ように伝統的なぶどうであり、それを誰かに売ってもらうという「指示待ち農家」が大半であった。

それに不満を持った本社長は、実家に帰るや否や、仲間と「ぶどう研究会」という勉強会を立ち上げた。そこで、ぶどう栽培や経営の研究を行うほか、全国各地の先進的経営を行うビジネス農業体などを調査して歩いた。

その結果、農業の衰退は、産業の限界ではなく、それに携わる人の事業の考え方・進め方に問題の本質があると確信。そして、それを変えれば、農業（ぶどう農家）はビジネスとして成り立つとの結論に達したという。

より具体的に言えば、十年一日の品種だけではなく、お客さまが求めるよりおいしい新品種の開発や、ぶどうの売り方・提案方法の改革、さらには「ぶどう」を基軸とした新分野進出などである。そのためには自らの経営革新こそが重要と、多額の費用を投下。その分野では著名な経営コンサルタントを招き、経営武装にも努めた。こうした努力が実り、今や石川県内を中心とした北陸に多店舗展開をするほか、東京の銀座にも進出し、顧客の高い評価を得ている。ちなみに現在の社員数は291人、その売上高は21億円に達している。このわが国最大級の「ぶどうビジネス農業体」は、多くの新規学卒者の憧れの会社にもなっている。

坂本光司 / さかもと・こうじ

1947年生まれ。福井県立大学教授、静岡文化芸術大学教授などを経て、2008年4月より法政大学大学院政策創造研究科（地域づくり大学院）教授、同静岡サテライトキャンパスおよび同イノベーション・マネジメント研究科兼任教授。他に、国や県、市町、商工会議所などの審議会・委員会の委員を多数兼務している。専門は中小企業経営論・地域経済論・産業論。著書に「日本でいちばん大切にしたい会社」（あさ出版）、「この会社はなぜ快進撃が続けるのか」（かんき出版）など。

# 「税務署の仕事」 動画で配信中!

動画やイラストで国税庁の取組などを紹介するコーナーをホームページで公開しています。



税 国税庁  
www.nta.go.jp

詳しくはこちら



税の役割と税務署の仕事 検索

# 税を考える週間

平成26年11月11日(火)~17日(月)

自宅からネットが便利  
申告・納税

e-Tax  
国税電子申告・納税システム

